

【特集】

菅井 直也先生 記念講演 (人間福祉学会 活動報告)

広島文教大学 人間福祉学会 事務局

I はじめに

令和 5 年 2 月 18 日 (土)、広島文教大学人間福祉学会を開催いたしました。昨年度はオンライン開催でしたが、今年度は世の中の情勢も鑑みて、新型コロナウイルス感染拡大予防を講じながらハイブリットでの開催としました。

今年度は人間福祉学科、開設創設当初 (2000 年 4 月) より長年にわたり教育・人材養成に携わってこられた木村敦子先生、菅井直也先生がご退任される年です。今回はお二人を代表して菅井直也先生より退官記念講演をしていただき、講演後は卒業生が集い、木村敦子先生、菅井直也先生の囲む会を実施いたしました。

中村 (司会) :

只今より令和 4 年度人間福祉学会を開催いたします。まずは、足元の悪い中、また週末の貴重なお時間に、これだけ大勢の方にお集まりいただきましたこと、誠にありがとうございます。昨年度の学会に参加された方々は、記憶にあると思いますけれども、昨年度は人間福祉学科の創設 20 周年記念のイベントを行いました。新型コロナウイルス感染症がなければ、本来は 1 年早く取り組む予定でしたが、感染症拡大ということもあり、昨年度オンラインにて実施させていただきました。今年度はその学科立ち上げのメンバーでもいらっしゃる木村敦子先生と菅井直也先生がご退職されます。そこで今回はご退職される先生方を代表して、菅井先生の記念講演のプログラムを中心に添え、会を実施してまいります。

なお、最後にはご退職される先生方を囲む会を予定しておりますので、特に卒業生の方々はゆっくりと別れを惜しんでいただければと思います。申し遅れましたが、本日司会を務めます、中村です。よろしく願いいたします。では、さっそくプログラムに入参ります。

木村 (人間福祉学会会長 挨拶)

みなさんこんにちは。

本日は広島文教大学人間福祉学会にご参加いただきありがとうございます。

本日は以前、人間福祉学科で教鞭をとっておられた蛭江紀雄先生、現在は心理学科長の福田一雄先生、卒業生にとって身近な存在であった歴代の助手の先生方 (大竹智恵先生、中村潤子先生、内田沙織先生) や懐かしい卒業生の方々にもたくさんお集まりいただき、本当にありがとうございます。大変に嬉しく思っております。

平成 12 年に開設された人間福祉学科は、今年度 4 月に第 23 期生の新入生を迎えました。そして、この 3 月には広島文教大学で入学してきた初めての卒業生を送り出すこと

になります。

この人間福祉学会は、1期生の皆さんが卒業学年を迎えられる直前に、今後の卒業生の生涯学習の拠点となることを願って、平成14年12月に誕生しました。昨年12月で設立から20年となりました。以前にもご紹介しましたが、当時の学科長岩崎貞徳先生が、人間福祉学会の学会誌の創刊号に学会誕生にあたって、次のような文章を寄せておられますので、一部ご紹介いたします。

「この学会が将来大いに飛躍するかどうかは、在学生の双肩にかかっています。また、この学会が卒業生の生涯学習の拠点になることができるかどうかは、卒業生のリード次第だと思います。皆さんの奮起を期待している次第です。しかし、この種の学会は往々にして形骸化する傾向があります。その原因は一言で言うと初心を忘れるからだだと思います。例えば、人間福祉を学ぼうとした動機や人間福祉の学問・理論をどう活かし、どんな人生を送るつもりだったのかを忘れてしまったり、あるいはそんなことは考えもしないで、華々しく脚光を浴びることに注意を向けて、表面的な厚化粧に専念しようとしたりするからだだと思います。私たちは内面を磨くことに集中したいものです。そうすればきっと、いぶし銀のように美しく光り続けるあなたと学会と学科になるに違いありません。」

このような想いのもと、人間福祉学会は活動を続けてきました。ここまで活動を続けて来られたのは、卒業生の皆様のおかげだと思っています。

本年度は菅井直也先生に記念講演をしていただきます。菅井先生は、人間福祉学科開設前から本学に赴任され開設準備に尽力されました。人間福祉学科の歴史を最もご存じの先生です。菅井先生、私ともに本年度末で退職となりますけれども、人間福祉学会には引き続き関わらせていただきたいと考えています。

今後も学びの拠点としての学会となりますことを、そして卒業生の皆様がここで出会い、横の繋がり、縦の繋がりができればと、祈念して開会の挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。

II. 記念講演

中村（司会）：

ありがとうございました。それでは、菅井直也先生の記念講演『「ん」からはじまるまちづくり～福祉と防災と防犯と教育と～』に移ってまいります。

講演を始めていただく前に、菅井先生のプロフィールをご紹介いたします。1955年生まれ、1975年広島市中心身障害児者父母の会による広島在宅障害者青年教室の発足・運営にボランティアとして参画されています。1985年広島大学大学院教育学研究科博士課程後期 教育行政学専攻を修了なさいました。広島大学教育学部助手として勤務の後、1987年鈴峯女子短期大学講師に就任。同助教授を得て、1999年から広島文教女子大学の教授となっていられっやいます。この間、広島市社会福祉協議会ボランティア情報センター運営委員会や同会福祉教育推進委員、広島市精神保健対策協議会、大都市特例専門員、広島県の農山漁村高齢者ビジョン策定検討委員長、もろもろの地域における様々な活動に貢献されたいられっやいます。そして、広島市初の精神障害者社会復帰施設を設立運営するはぐくみの里の理事長を経て、知的障害者の小規模作業所を法人化し、社会福祉法人やぎの理事長として施設運営を体験中でしたが、平成26年8月豪雨（広島豪雨災害）

により建物を全壊、移転と再興の後、利用者と家族、近隣住民の避難場所ともなるアイデアの新施設を建設するなど、事業継続計画過程の最中です。ボランティア活動や福祉教育、福祉のまちづくりをテーマに、社会福祉協議会や公民館、保健センター等での講演も多数なさっていらっしゃいます。著書も新しい教育学をはじめ、数多くございます。

それではお待たせいたしました。『「ん」からはじまるまち作り～福祉と防災と防犯と教育と～』菅井先生、よろしくお願いいたします。

菅井：

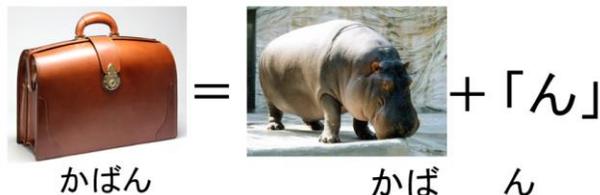
先ほど、木村先生のお話にあった、人間福祉学科発足前の準備の最中に某公民館でボランティア論をやっているときの私です。「基本的に変らないよ」という人もいらっしゃるでしょうし、「メガネが違う」なんてところが気になる人もいるかもしれません。23年前（2000年）の私ということになります。当時、45歳。



その年に、公的介護保険制度が始まるわけです。ちょうど、蛭江先生が老人ホームで介護保険に移行するまでの準備をなさって、本学に赴任された時期になります。

さて、蒲刈島だったか、大崎上島だったか出身の童話作家の正岡慧子さんという童話作家が書いた本に『かばんの中のかば』というのがあります。鞆ですね。この「かばん」から「ん」がなくなると、「かば」になっちゃいます。ある子がお爺さん、お父さんと引き継がれてきた古いカバンをもらうんです。少年野球チームで万年補欠なんですけど、ある時、監督から『お前バッテリーボックスに入れ。』と言われ、ここで僕が点を取らないと負けてしまうぞということで、頑張ってホームランをかつ飛ばすんですが、そしたらその家に置いてあった鞆が、その「ん」が、僕のバットに来ちゃったもんだから、「かば」になっちゃって、子ども部屋に「かば」が居る。それを道の向かいに、お店を張っているクリーニング屋さんのおじさんが見つけて、「大変」だっていうんで、お母さんの所へバイク飛ばしてくるんですね。「奥さん、奥さん、お宅に『かば』が居ます。」そういうお話なんですけど。今日のお話の道しるべが、この物語だろうなあということで、タイトルになっています。

『かばんのなかのかば』



さて、「支えあいのまち助け合いのまちを作しましょう」なんて、社会福祉協議会のスローガンとして、昔から使われてますけど…まあ大抵失敗してますね。そのスローガンの内容は、だれかれ構わず、助け合える、支え合える、そういうまちを作しましょう、支えあいの地域づくりをしましょうって言いたいわけです。そうなんです、皆さんのお住まいの地域はですね、支え合っていますか？と聞いてみたいのです。

要するに、今の「支えあい」には「あい」が無いんじゃないでしょうか？「あい」を取っちゃうと、ただの「支え」ですよ。卒業生の何人かは頷いてますが、その「あい」とは何か？「あい」とは「攻守交代」あるいは「コートチェンジ」のことです。野球で常にバットを振ってばかりで終わる、これでは不公平ですよ。常に守備をするのか？そんなことはなく、攻守交代して表裏をやることになっています。それでなきゃ面白くない。それから、サッカーとかバスケットボールとかバレーボールとか、ネットを挟んでやり合ったり、ゴールが2つあったりという球技だと「コートチェンジ」があります。時間でチェンジするのもあれば、点数入ったらチェンジとルールは色々ですけども、そうでないと不公平ですよ。実は福祉もそうじゃないのって。それが無いから、「支えあい」にならないんじゃないの？というわけです。

脱線しますが、「福祉ってなんだ」って。それは「ふだんのくらしのしあわせ」です。先生によっては、「ふつうのくらしのしあわせ」っていう人がいますけれども、それだと「ふつうじゃないっていうのはどういうことだ」ということになる。場合によったら差別にもなりかねないので、「ふだんのくらしのしあわせ」とします。

例えば、階段を踏み外して捻挫したとか、あるいは骨折したとかいうことに、もしなつたとすれば、明日の朝目が覚めていつものようにトイレ行こうとか、あるいは着替えようとかいう時に痛みを伴い、いつもどおりの朝のスケジュールがこなせなくなると思えます。トイレに行くとか、歯磨きをするとかいう簡単なことなんだけど、いつもと違ってきます。「ふだんのくらしができる」っていうことが幸せなんです。その普段の暮らしというのは、今、骨折を例にあげましたけど、いわゆる災害に妨げられるかもしれない、ということですよ。

戻りましてですね、「助け合いのまち」というのは、「いつでもどこでも誰でもが助け合えるまち」ということですが、それは実は「いつでもどこでも誰でもが“助けを求める”ことのできるまち」ということです。その「助け合いのまち」を作るっていうのは、「いつでもどこでも誰でもが助けを求めることのできるまち」を作しましょうということですよ。

ちなみに、ちょっとまた角度を変えますけど、自立という言葉がありますが、自立というのは自分ひとりで頑張ることではないですよね？かつ全部誰かにしてもらう事でもないですよね？じゃあ、どういうことかという「助けてもらう」ことです。

例えば、自分で出来ることが 60%しかないよという時に、あと 40%プラスして 100%になればいいわけです。つまり「助けを求める」ということです。

あるとき、本屋さんで立ち読みをしていたら、こんな表現に出くわしました。「自立とは他人に援助を求めないことではなく、他者との相互の支え合いの関係の中に上手に入って行くことである」(児美川孝一郎)。この方、同業の教育学の先生だったのですが、そのものズバリだなあと思って使わせてもらっています。

そこでですね、皆さん「助けて」と言われたら、どうしましょう。どうするか、可能性は3つだと思います。

ア. 関わり合いになりたくないで逃げる

イ. 言われる前に、手を差し伸べている

ウ. 助けてと言われたら助ける

皆さんの多くも「ウ」を選ぶと思いますが、「助けてと言われたら助ける」「言われなければ助けない」。さて、どういうことか？あなたは「助けて」が言えますかということですよ。「助けてと言われたら助ける人」それから「言われなくても助ける人」合わせると 85%ぐらいです。で、「助けて」って言える人はどうかというと、5%ぐらいしかいないんですよ。ほとんどの人は、この「助けてと言われたら助ける人」と「言われなくても助ける人」の 85%組なのです。しかし助けを求める人がいないので出番がない。みんないい人なんだけど、誰も助けを求めてくれないから出番がないという不幸が起きます。「助ける」と「助けられる」両方ないと助け「あい」にならないんですよね。必要なのは、「助けて」と言える人を増やすことです。そのためにどうすればいいんでしょうか？助け方の勉強より助けられ方の勉強が先ではないでしょうか、ということになります。

例えば、介護講習会だとか、ボランティア講座だとか、特に社協なんか何十年もやりますけれど、みんな「助けたい」という思いがあって、ボランティアセンター、町内会単位にボランティアセンターを作ったようなまちもあったりします。それこそ、この学科ができた頃、よく呼ばれましたよ。「ボランティアセンターを作りました。電話も引きました。チラシもまきました。当番が電話番しています。だけど、電話かかってこないんです。お呼びがないんです。先生どうしましょう？」という、助言を求められました。

「私は助けを求めなさいと学校時代に先生から嫌と言う程、指導をされてきた。」そういう人いらっしゃるのでしょうか？…いないんです。じゃあ、家庭で親から「なんで助けを求めないの」「助けを求めなければなりません」ときつく育てられた人はいますか？就職した時に職場の先輩から「なんで助けを求めないの」と厳しく教えられてきた人はいますか？…いないんですよ。こういうことは、どこで学ぶんでしょうかね。

皆さん苦手なんです、助けられるということが。だから助けられ講座すればいいですよ。実は日本で、最初にこの『助けられ上手さん』に学ぶ『助けられ上手さん』養成講座というのをやったのは広島県佐伯郡大野町の社会福祉協議会でした。

皆さんのまちのというか、近くにいる助けられ上手さんを探して、その真似をしてみると結構いけます。ただ、天性の生まれ持った性格みたいなどころもありますが、真似

だけでもある線までは行けます。私自身、臆病で恥ずかしがり、だから助けを求めるなんて小っ恥ずかしくてうまくできないですが、ある線まではできるようになりました。

必要なのは「助けて」といえる人を増やすことです。なので、たとえば町内会のリーダーとか、老人クラブのリーダーとか、学校の先生とか、あるいは校長とかリーダーたるものを率先して助けを求めて、お手本を見せてあげるべきだろうと思います。

ちなみに、ある集落の格言に「病は市に出せ」というのがあるんだそうです。要は「困りごとは、一人で抱え込まないでみんなに話さない、相談しない。」っていうそういうことなんですよ。

ちなみにごく最近まで日本で一番自殺率が、高いのは秋田県でした。小説や映画でまで取り上げられるぐらいだったのですが、2人だけ反対の研究をした人がいます。「自殺率が低いのはどこだろうか」と研究したのです。結果は、徳島県のあるまちでした。そこへ行って調査したのが、1人は看護学の先生、もう1人は精神科の先生でした。なぜ自殺率が低いのかについて調べてみて分かったことは、いわゆる井戸端会議あるいは世間話で、みんな、身内話のいろんなことを喋り、黙っているのが不気味に見えるくらいに、何でも話ってしまうまちだったということです。その結果、自殺する人がほとんどいないまちになったということです。出せばいいんですよ。助けを求めればいいんですよ。

それで話を戻しますが、この「いつでもどこでも誰でもが支え合えるまち」になればいいよねっていうことでした。じゃあ、その「支えあいのまち」ってどういうまちでしょうか。それが実現すれば、福祉の感覚でいわゆるその「福祉のまち」「支えあいのまち」ということになるだろうと思います。そういうまちって、災害、例えば大地震だとか、台風が来て水が溢れそうだとかいう時に、「一緒に逃げようや」と声をかけられるまちでしょ？近所あるいは身内のおばあさんやおじいさんに、逃げてもらおうと行くんだけど、「私はいいから」と断られている間にもだんだん水が上がってきて困りました、という体験をした方、いっぱいいらっしゃると思います。その時に、一緒に動いてもらえるまちってどういうまちかっていうと「福祉のまち」でもあり、そういうまちでは、振り込め詐欺みたいなの、電話がかかってきたときに「こんな電話があったんだけどね」って隣のお家に相談できる、おばあさんが声をかけるまち。あるいはコンビニでアルバイトしている時に怪しげな支払いをしに来たおばあさんに「これ何の代金なんです？息子さんに言ってみて相談した方がいいんじゃないですか」って言えるまちってことですよ。

防災のまち＝福祉のまち＝防犯のまち。防災は消防の所管、福祉は役所の福祉部局の所管あるいは社協の所管、防犯は警察とか防犯協会の所管、という風になっていますが、例えば町内会長とかの立場でこの3つをやらなきゃなんないっていうことになったら、大忙しになります。じゃあやることは？「助けを求められるまち」ができれば3つパーフェクトということです。

さて、その地域の課題（福祉課題）は、よく言うのが「自分にできることをしましょう」。それから、「みんなでできることをしましょう」という話で終わりますけれど、そうではなくて、ここでは「あなたにもできるということを認めてあげましょう」というのが有効で「新しく何かをしましょう」あるいは、「組織をつくりましょう」と言われたら億劫になります。さっきの「助けられ上手さん」じゃありませんけれども、もうやっているっていうものが見つかるっていうことですよ。例えば、「声をかけ合いましょう」という

ことなら、消防団が声かけていて、その成果が上がっているよというならば、それでいいじゃないですか。それこそ、そこで培った関係が福祉課題であろうが、災害の時であろうが、隣のおじいさんに声を掛けてくれるじゃないですか。

社協はよく新しいネットワークを作りたがりですが、既にあるものを活用すればいいわけですね。既にあるっていうのは、そこにある人間関係も活用してということなんです。これはアンケート用紙を配っても把握できません。

そういうわけで、このいわゆる見守り活動っていうのは、制度に任せて解決ではないっていうことです。制度にはめるのがケアマネジメントだと思っていると大間違いということですが、その住み慣れた場所、人のつながりを可能な限り活かして行くということだし、それはついさっき言いましたが、住民の皆さんの暮らしのネットワークがあるんですから、それを発掘し、見出すということから始まります。

ある新人の消防団員が村の家々を回ってお祭りの寄付をお願いしに回るといふ時の話です。過疎化した村で、お年寄りの家々に行くたびに先輩が「ここは何歳のおじいちゃんが一人で住んでいて、こっちの部屋にこっち枕にして寝てるんよ」とか「このうちはお風呂は薪で炊いてるんよ」とか、そういうお祭りや寄付とは関係ないどうでもいいことを色々教えてくれるんです。「鬱陶しいなあ」と思っていたら、彼は気がつきました。あ、そうやって自分を今日連れて回ったのは、いざ災害があって、消防団が助けに行かなきゃいけないという時に、あるいはその家が倒壊してしまったという時に、的確に「このおじいさんは、この位置を頭に寝てるから、この辺を掘れば、この辺の瓦を剥がせば助けられるぞ」という、そういう情報を教えてくれるんだということに気づいて、一生懸命先輩について歩きました、と話してくれた人がいます。「誰がどこでどのようにしているか想像をめぐらすことができる人になってよ」ということです。授業の時にも私よく言ったのですが、「想像力は創造力」というギャグ。イマジネーションがあるからクリエイティブな仕事ができる。要するに「ほかの人が気になるまちを作りましょう」ということです。それをこう「想い遣りのまち」と呼ぶわけです。そこに「支え合いのまち」ができる。「災害の時に亡くなる人がいませんでした」とか「特殊詐欺に遭う人がほとんどいません」とか。

そこで、皆さんにちょっと言っておきたいのは、この「困った人」というのは「困っている人」であることが多いということです。例えば、小学校の教師なんか考えた時にいつも宿題をやってこない子っていうのは「困った子」ですけれど、それはそういう家庭の事情も含めて、なんか困ったことがあって「困っている子」だということです。このことは、災害時だからといって異なることはありません。困っている人は、何に困っているのかなというところに想像力を巡らしたいなあと思うのです。

防災を先頭に立ててみると、リアルなコミュニケーションで人々の心が満たされたコミュニティに実現して行くわけです。バーチャルの世界の中だけではどうにもなりません。実際にそういうリアルなコミュニケーションがあるところだったら、「早く逃げようや」と声かけますよねっていう、そういうことになります。

ただ、このコロナ過でいろいろ制約が出てきて、それを乗り越える工夫っていうのは勿論、必要なんですけど、そのことはちょっとここでは置いておきます。

「防災コミュニティ」＝「犯罪コミュニケーションの入る余地がない防犯コミュニテ

ィ」ということになるだろうし、あるいは「孤立死とか孤独死を出さない福祉コミュニティ」ということになるだろうし、「災害の時に取り残される人のない防災コミュニティ」ということになるだろうということです。

さて、違う視点で「する人、される人」というものもあります。よく福祉の仕事をしてる人が陥ることがありますが、これはもはや古いんですよ。例のジェンダー問題と同じで、いわゆる「要援護の人を輪の中に入れてしまいなさい」ってことです。要するに、「コートチェンジ」を起こすのが、福祉のプロの仕事のはずです。「あなたは介護される人、私はする人」では、今はよくても、次の瞬間には逆転が起こっていないと、コートチェンジが起こっていないと、不公平ですよ、ということです。

先ほどから災害、災害と言ってますけど、この災害も常に考えた地域福祉をしましょう。それは「災害列島と言ってもいいこの国に生きる宿命です」というとあまりにも悲しいので、「これはアートである。技である。災害対応の技は郷土の文化である。」というのはいかがでしょうか。技は地元で地方ごとに違っていいんです。町内会ごとに違っていいんです。そういうことです。それをやらなければいけません。

地域福祉と地域防災というのは別物じゃない。もちろん防犯も別物じゃありません。この自助とか互助とか、いろんな整理が教科書に書いてありますけど、復習要りますか？災害で言えば、「被災者が自分でという自助」、「家族や住民でっていうことになる」と互助」そして「災害ボランティア・NPO などが共助」「法律による政府・地方自治体によるのが公助」こうなります。

災害対策の課題は3つあります。1つは、この発生可能性の認識をどれだけしてるかということ。色々グローバルに起こっている災害の映像を見せつけられてますんでわかってる、と思うんだけど、やっぱり皆さんピンときてないです。本学も6年前に90cmも水に浸かっているのに。いつどこで発生遭遇してもおかしくないを意識する、常に意識する習慣っていうのが有効です。私もそういう体勢で今日きています。場合によっては、家に帰るまでに食いつながなきやいけませんので、リュックサックの中にお菓子が入っています。それから夜をいくつか過ごさなきやなんない可能性があるんでヘッドランプとか持ち歩いています。

過去の災害の被災碑とか住民有志の事績というのは大事なことでして、防災設備の強化は有効です。しかし年々被害も大きくなりますよ。設備の強化は有効だが、被害も強化される。だから避難への躊躇とあきらめを生まないトレーニング。いざ、おじいさんに声をかけても動かないので、やっぱり常にトレーニングしてるっていうのは有効です。あるいは「おはようございます」「いいお天気ですね」という声をかけて、顔が繋がっていると、「あの人が言うなら逃げるか」ってことにもなります。知らない人が、例えば警官とかがやってきて、「逃げなさい」って言われると、「なんであんにに言われなきやなんないんだ」って思う人もいるわけで。

その避難の支援者を確保するという意味でも、避難訓練や支援を日常化するというのは大事だと思います。じゃあ、毎週避難訓練をやりましょうと言ったって、それは現実的でないですね。じゃあ、どうかっていうと「だれかれ構わず助け合えるご近所づくり＝福祉のまちづくり」が生きてくるでしょということです。しつこい話になってきましたね。

防災文化として、実は避難を誘う小道具のお手本が、災害のニュースの中に色々登場します。そんなことを気をつけて見ていると、あるいは想像力を巡らして見ると色々真似できます。例えば、玄関先に避難マップは貼っておくんだけど、そこに「誰を連れて逃げるか」ってことを書き込んだがために取り残された人がいなかったという、愛媛県大洲市三膳という集落。それから、5年間に20回の「空振り」避難訓練だったが、21回目に起きた災害で、全て家が全壊したが犠牲者なし、という京都府の綾部市朝日町。それから、自主防災組織の活動が結果的に効いた事例が、堤防が壊れて工場が水につかり、そこがアルミナを使う工場で、水とかは反応して爆発が起こったけれど、亡くなった方はいませんでした、という岡山県総社市下原地区。そんな例は、いくらでも出てきます。それを福祉と関係ないと見ているともったいないです。

「困っている人」とか「気になる人」を輪の中に入れてみましょう。さっき言った「困った人」は「困っている人」です。それから、「公平・平等」という「不公平・不平等」。「イコリティとエクイティ」の違いなのですが、「想像力は創造力」。被災時には平時以上にこの想像力が生きてますということです。

いわゆる個人情報保護をめぐる、突っ張る人が出てくるんですけど、「人の生命、身体又は財産を保護するため、緊急の必要があり、かつやむを得ないと認められる時には…」という例外規定が個人情報保護法の中に書いてあります。実は、平時に秘密だと思われていることは、災害時にはそれが出発点になるわけです。「この人はこういう持病がある」ということは、平時にはそれは秘密かもしれませんが、災害のときになると、「必要な薬は足りるか、先に逃げた方が良いのでは」とかね。

そこで、ある町内会が公園の中にある防災倉庫の扉の内側に災害時には必要になるであろう情報を記した名簿を貼りました。普段は鍵が掛かっているから秘密です。必要な時というのは鍵が開かれて、避難しよう、避難所を設営しようという時です。その時に扉を開けたら、名簿がある。「この人はいるね」「この人の家には行ってみよう」とか出来るようにした人がいます。その人とは、この学科の学生のおじいさんが出したアイデアなんで、私、言いふらしています。

で、終点は「大逆転」ですね。さっきのコートチェンジです。要は「受け手を担い手に」「要援護の人を援護の側に」回ってもら、あるいはいろんな手当とか保護とかを受給している人を逆転して、せっせと稼いで税金を納めてもらえるようになったらいいね、というわけです。そういう逆転。「非常防災を常態に」してしまうという逆転。それを本日ご参加の皆さんの演出で、実現させましょう。卒業生の中には既にされている方もおられるはず。「わがまち流の逆転を」。

さて、ここで「ん」はどこに行ったのでしょうか？

備えのカナメは、「安心があると関心がなくなる」。例えば、「うちはヘルパーが来るからもういいや。福祉の方でなんとかしてくれるだろう」で、隣近所の人に関心がなくなっていきます。それは困るんですね。だからと言って、監視されては困るわけですよ。「かんし」は嫌だがこれに「ん」をつけた「関心」は持っていてほしいということです。

これは例えば、いわゆるヤングケアラーと言われる人たちもそうだし、介護している家族もそうだけど、別に手伝ってもらわなくてもいい、代わってもらえるとも思わない、だけど関心は持っていてほしい、見守っていてほしい、ということでしょう。関心の例って

というのは「秋深し、隣は何をする人」と気になるぐらいがいい。それをどう演出できるかな？

さて、ここら辺で終わろうと思いますが、今日、オンラインでご参加いただいた方の中には、最年長である第1期生の方もおられまして、私も生涯会うことないだろうなあと思っていた人もいたりするんですが、色んな立場で、色んなタイミングで私と出会った方々、ありがとう。

中村（司会）：

菅井先生ありがとうございました。すごく内容の濃いお話をしていただいたと思います。今の医療とか福祉とか行政に関わる方々は、もう渦中にあるんだと思いますが、今社会が目指す共生化推進事業ですよ。いかにこう繋がりを作っていくのか、新しい地域づくりをして行くのかってところが、あの喫緊の課題になっていますが、菅井先生はもう20年前から同じメッセージをこう投げかけられていたなあっていうことを、改めて受け止めることができました。しかももっと当たり前、もっと肩の力を抜いてできることから始めればいけないかっていうその辺の姿勢っていうところも本当にそうだなと思いました。肩の力を入れて何かシステムを作ることに安心をしてしまうっていう、改めて専門職の仕組みみたいなところも、もう一度見直す、そういう機会でもあったと思います。要はもう社会モデルっていう環境が変わっていけばっていうところですね。その部分の様々なヒントをいただいたように思います。

もう一度、温かい拍手で皆さんよろしくお願ひします。ありがとうございました。